

公益財団法人 庭野平和財団主催
第五回GNHシンポジウム

《開催趣旨》

庭野平和財団設立30周年（2008年）の企画として始まりました GNH シンポジウムも本年で5回目を迎えさせていただくことが出来ました。

このシンポジウムは、「GNHと地元学」というテーマを、GNH（国民総幸福量）の哲学を学びながら、水俣地元学を事例としてご紹介するとともに、水俣での現地学習会と並行して実施してまいりました。

昨今、日本のみならず世界中で「地元学」的な地域活性化のための活動が盛んになってまいりましたが、基礎となった哲学は世界的にはいくつかの流れがあります。日本の場合には、立教大学大学院教授の内山節先生の哲学が広く受容され、多くの賛同者がおられます。例えば、2010年の第3回シンポジウムで講師をお勤めいただいた水俣地元学創始者の吉本哲郎氏もそのお一人です。

そこで「地元学」をより広い視野から捉えなおす意味でも、昨年が続いて、内山先生から日本の“むら（＝地元）”が持つ未来への可能性と、現在の課題とその取り組みについてご講演を頂き、その後、パネリストの方々より現在行なわれている“生きる場”づくりのさまざまな取り組みをご紹介頂き、参加者ご自身の今後の取り組みの一助としていただきたいと思います。

いままで学んできた「GNH」や地元学の視点を、具体的な”生きる場”づくりの中に見出すとともに、「環境とエネルギー」という視点を新たに加え、いままでの学習をより豊かなものになりたいと考えております。

プログラム

- 13:30 開会挨拶、趣旨説明 - 野口専務理事
- 13:40 講演「日本の“むら”から未来を想像する - 私たちの“生きる場”づくり -」 - 内山 節 (立教大学大学院教授)
- 14:40 休 憩
- 14:50 パネルディスカッション
コーディネーター 草郷孝好 (関西大学教授)
パネリスト 内山 節 (立教大学大学院教授)
槇ひさ恵 (明るい社会づくり運動理事長)
廣瀬稔也 (東アジア環境情報発伝所代表理事)
- 16:20 休 憩
- 16:30 質疑応答
- 17:00 閉 会

《講師、コーディネーター、パネリスト紹介》

内山 節 (うちやま たかし) /立教大学大学院教授

1950年東京生まれ、哲学者、立教大学大学院教授、NPO法人森づくりフォーラム代表理事。高校卒業後、大学などの高等教育機関を経ることなく、書籍などで自らの思想を発表しながら活動し、哲学する人で知られる。1970年代から現在に至り、東京と群馬県上野村との往復生活を続けている。著書に『「里」という思想』(新潮社 2005年)、『日本の「むら」から未来を想像する』(農山漁村文化協会 2006年)、『「創造的である」ということ(上、下)』(同、2006年)、『戦争という仕事』(信濃毎日新聞社2006年)、『清浄なる精神』(同、2009年)など多数。

草郷孝好（くさごう たかよし）/関西大学教授

1962年愛知県に生まれる。東京大学経済学部卒業後、民間会社勤務などを経て、スタンフォード大学で開発経済学の修士号を取得、のちにウィスコンシン大学マディソン校にて開発学の博士号を取得した。世界銀行、国連開発計画（UNDP）に勤務し、途上国の貧困削減政策形成にかかわる経験を持つ。明治学院大学、北海道大学、大阪大学を経て、現在は関西大学社会学部教授。人間開発の視点に立ち、内発的な地域社会の創造をテーマにして、現在、水俣市、長岡市、兵庫県、ネパール、ブータンなどでフィールド調査研究や実践支援を精力的に行っている。

槇ひさ恵（まき ひさえ）/明るい社会づくり運動理事長

東京都に生まれる。ボランティア活動の推進や障害者問題の啓発に長年携わる。傍ら市民活動のネットワーキング、NPO支援システム等に関する調査・研究および実践に携わる。2003年、モンゴルやタイ等のハンディを抱える人びととの交流・支援を行う(特活)エンジン創設に参画し、常務理事・事務局長。2007年より(特活)明るい社会づくり運動副理事長、2010年より理事長。(特活)日本チェルノブイリ連帯基金理事、(特活)パブリックリソースセンター理事、日本ボランティア学会副代表。都留文科大学、立教大学院で非常勤講師。

廣瀬稔也（ひろせ・としや）/東アジア環境情報発信所代表理事

1972年生まれ。2000年に東アジア環境情報発信所を設立。2011年にNPO法人の認証を得て、現在代表理事。中韓の環境NGOと日中韓環境情報3言語サイトENVIROASIAを運営。現在は、主にアジア域内におけるE-waste問題や水汚染問題などに取組む。共編著書に『環境共同体としての日中韓』（集英社新書、2006年）、『市民セクター経済圏の形成』（日本評論社、2003年）、『地球と生きる133の方法』（家の光協会、2002年）などがある。

1. はじめに

—私と群馬県上野村

2. 上野村の村づくりについて

—自然、生者、死者がともにある世界を守る

—新しい共同体への構想と開かれた結びつき

3. 村における場と関係

—地域を関係の網としてとらえる

—自然との関係、村人の関係、死者との関係、過去との関係、未来との関係、・・

—関係がつくる場のなかに加わる人々・・新たな移住者、都市の人々の加わり

4. 村の信仰、場の信仰

—村という場がもたらす信仰について

—近代における信仰の個人化

—共有された願いのなかに加わりはじめた都市の人々

5. 新しい“共有”の世界をつくりだす

—共有された文化、ともに生きる経済、助け合う広域的なつながり

6. まとめに代えて

—これからの生きる世界と“むら”